



マーシャル方面遺族会
 (旧クェゼリン方面戦没者遺族会)
 〒103 東京都中央区
 日本橋人形町1-8-2
 電話 03-661-8760
 振替口座東京 0-93487 番
 編集兼発行人 佐藤宗丕



これがルオット島
 手前がルオット島(ロイ)滑走路の先にニムル島
 (ナムル)が接続している

平成二年

慰霊祭 総会 直会の御案内

会長 佐藤宗丕

全国の会員並びに会友の皆様にはお健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

本会恒例の慰霊祭と総会を次の通り行いますのでお知らせの方々をお誘い合せ御参集下さい。

日 時 平成二年二月十一日(日) 建国記念の日
 午前九時集合リ靖国神社参集所

受付・懇談 九時—十時三十分

定期総会 十時四十分—十一時三十分

△議題 諸報告・会務計画・予算▽

慰霊祭 十二時 昇殿参拝

※慰霊祭は御家族お揃いで参拝できるよう二月の第二日曜に行っております。

同封の私製はがき(料金本会負担)は、会員名簿訂正の資料としますので、慰霊祭に参加しない方も必ず全欄御記入の上一月十五日迄にお送り下さい。

◎九段会館に宿泊を希望される方は、同封のはがきで、一月十五日迄に本会にお申込み下さい。料金は一室五人の相部屋で、一泊二食付一人七、一五五円(税込)の特別価格です。本会が受取った申込みは九段会館に取りつぎますので、申込後の取消し、変更等は、直接左記に連絡下さい。

〒102 千代田区九段南一—六—一五

九段会館 宿泊部(電話03—261—1552—2)

その時は本会にもお知らせ下さい。

◎第二十一回直会(なおりい)旅行会を次の通り行います。人数に限りがありますので早目にお申込み下さい。

(以下20頁へ)

目次

平成二年慰霊祭 総会 直会の御案内 会長 佐藤宗丕	1
平成元年度の現地慰霊	2
現地慰霊に参加して(1)	3
蓮尾 諭吉・田賀 将一 金子庄之助・佐藤 敏子 西森サツキ・川越 コウ 田賀 朋子・牧野富美子	6
正誤訂正	6
沖繩平和祈念堂に霊石奉納 ブラウン環礁の玉砕(3)	8
……… 矢野 雄三	9
現地慰霊に参加して(2)	13
鈴木つな子・黒川 直吉 猪瀬 ナカ・岩田とし子 激戦二十年後の戦跡(3)	14
……… 長谷川 敏	14
栗林顧問 ツバル国名誉領事に	15
靖国神社遊就館に 重錘式置時計を奉納	15
……… マーシャル、ギルバート	15
戦線に想う……… 蓮尾 諭吉	16
ウオッセ島の今昔の情報を お寄せ下さい……… 秋本 英郎	16
本会会則全文	18
特別弔慰金支給について	18
会員名簿訂正(3)	19
……… 寄付者芳名	19
……… 靖国神社昭和大使修築竣工	19

平成元年度の現地慰霊

Ⅱクエゼリン・ルオットⅡ

実現の経緯

ルオット島・ニムル島(現ロイ・ナムル)は米軍の特殊地域のため現地慰霊は到底不可能とされておりましたが、会員の年齢事情から早期実現との声が近年とみに高まってきました。

かねてクエゼリンのチャップマン司令官に事情を申し上げて懇請しておりましたところ、六三年八月に着任されたハリス司令官から「あなたの慰霊訪問を歓迎する。前任のチャップマン司令官が本年七月七日付であなたにあてた書簡で述べた通り、あなた方の価値ある企画のお手伝いをさせて頂くことは私並びに当地駐屯部隊の大きな誉れであります。云々」とのありがたい文書を頂きました。

平成元年一月の政府主催の慰霊巡拝には諸般の事情で計画に組込んで頂けなかったため、司令官の折角の御好意を無にする結果になりましたが、この際は非実現を、との声により本会単独企画により次の通り実施しました。

行動概要

(時刻はそれぞれの現地時間)

第一日 平成元年八月二三日(水)

午後一時 靖国神社に集合、自己紹介、日程説明、役割り委嘱(団長に佐藤、補佐として蓮尾、佐竹、黒川)結団の後、神社参拝。次に千鳥ヶ淵墓苑に参拝しバスで成田空港へ。

午後七時三〇分 JAL076 便離陸。

……日付変更線通過……

(23日) 午前七時三〇分 ホノルル

着、市内見学(ヌアス・パリ、イオラニ宮殿、パンチボール(太平洋国立記念墓地参拝)など)

△アウトリガー・プリンス・クヒオ・ホテル泊

第二日 午前六時四三分 ホノルル発

CO957 便

……日付変更線通過……

(25日) 午前一〇時一五分 マジユロ

着団長等はアマタ・カブア大統領表敬

訪問、その他は島内見学

……日付変更線通過……

夜 中国料理店ウッデン・ハウスでマジユロ在住の山村さん外の日系人と会食

△ロバート・レイマス・ホテル泊

第三日 (26日) 午前四時三〇分

チャーター便でマジユロ発

……日付変更線通過……

(25日) 午前五時五五分 クエゼリン

着陸、ハリス司令官がタラップ傍にお出迎え下さる。以後の移動は軍のバスを提供される。(添乗案内はデオオンヌさん) パシフィック・ダイニングルームで司令官と朝食を共にし、クエゼリンの墓苑にて慰霊。

午前一〇時二〇分 ショート・エアークラフト機で小雨降りつつルオット

へ。玉碑の日から四五年目に感激のひと時。テープではあるが、国の鎮めを献楽する。このような立派な墓苑を造成し、永年管理して下さっていることに感謝の意を表するすべを知らな

い。戦いの跡やわが軍兵士の遺品を見、在島二時間、後髪ひかれる思いで一二時三〇分島を発った。

クエゼリンのヨック・ユック・クラブ

で、司令官、フルトンさん、デオオンヌさん、それにホーリー秋さん、ラボ

イント英子さんも加わって中食、懇

談。お心遣いが心に沁みる。

メーシー百貨店の売店でショッピ

グの後空港ビルでお別れの挨拶を交し

お見送りをうけて一六時五分、エア

ミクロネシアでクエゼリンを離れた。

ジョンストンに着く筈のところ、一九時にマジユロに着いた。エンヂントラブルのため引返したのだった。

ホテル満室により、ボランティアの

私宅に泊めて頂く。床に毛布を敷いて

寝た者、折たたみ椅子を二つ並べてそ

の上に寝た者もあった。

第四日 午前九時一五分 グラムから

来たCO957便でマジユロ発、一二時すぎにホノルル着。

夜は「将軍」で徳原夫人、中田夫妻、大

里夫妻とその長男夫妻とで会食懇談。

第五日 真珠湾でアリゾナ記念館に敬

弔、慰霊

第六日 一二時四〇分 JAL1089

便でホノルル発

……日付変更線通過……

第七日 八月二九日(火)

一五時一五分 成田着。参加者の良識

と天佑神助により百点満点の成果を得

られたことはありがたい幸せでした。

参加者

佐藤 宗 丕 蓮尾 諭 吉

佐竹 エス 黒川 直 吉

金子 庄之助 金子 サヨ子

佐藤 敏子 猪瀬 ナカ

川越 コウ 鈴木 つな子

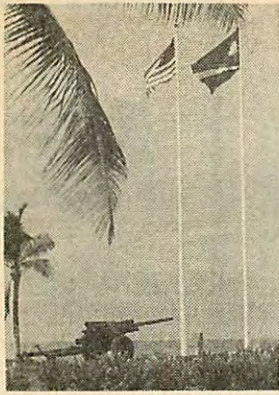
西森 サツキ 岩田 とし子

田賀 朋子 牧野 富美子

田賀 将一

安部 靖彦(日通旅行添乗員)

(この項 佐藤宗丕)



クエゼリン空港の星条旗(左)と
マーシャル諸島共和国国旗

現地慰霊巡拝に参加して

平成元年八月二三日～二九日
クエゼリン・ルオット

参加された皆様から感想、礼状、報告文などを沢山頂きましたが、紙面の都合で載せられないものまたは一部を割愛したものもありますが事情御賢察の上御了承下さい。

(地名は戦時中の呼び方にしました)

兄 蓮 尾 論 吉

平成元年一月末の厚生省主催マインヤル・ギルバート方面慰霊巡拝の際は諸種の都合でルオット島(現・ロイ・ナムル島)まででは行くことができなかった。このことを大変残念に思われた本会の佐藤会長は熱誠溢れる懇請状をクエゼリンの司令官に出されたところ同司令官ハリス陸軍大佐から友愛の情に満ちた招待状が送られてきた。その上現地における分刻みの綿密な旅程表まで添付され到れり尽せりの配慮には全く頭の下る思いがした。

ルオット島への立入りは終戦後暫くの間を除き、とくにクエゼリンのミサイル設備が移設され始めてからは極めて厳しくなったようで、戦後四四年にして、今回の慰霊が公式に許されたのは、偏にハリス司令官の人的見地に基づく絶大な御厚意によるものであ

ら現地と連絡を取っておられた佐藤会長の御努力と、一月訪問の際における会員の言動に対する先方の深い信頼感があつてのことで、この関係は今後ともますます大切にしてゆかねばならないことと思う。

なお今回の訪問者はルオット島関係戦没者三千名近くの方々の遺族のほん



向って右から
マリアンヌ・ディオヌヌさん
デボラ・フルトンさん
フィリップ・R・ハリス司令官

の一部であったが各自遺族代表のつもりで慰霊を果して来た次第であった。ホノルル経由でマジユロに一泊した此度のルオット関係遺族一行一六名、

(日通の添乗員一名を含む)は、八月二六日四時三〇分発のマーシャル航空のチャーター便(西ドイツ製ドルニエ二二八―二〇〇型機・一九席・双発ターボプロップ機)でマジユロ空港からおだやかな天候の中を指定された通り二五日五時四〇分クエゼリン島着(当地はハワイと同一日付を採用)、飛行機のタラップの傍には、まだ薄暗い中をすでにハリス司令官が出迎えに見えており、連絡係のデボラ・フルトンさんと今日一日一行の案内をして下さるマリアンヌ・ディオヌヌさんを紹介された。

六時から七時三〇分の間基地内のパシフィック・ダイニング・ルームで司令官の挨拶、会長の謝辞の後司令官と朝食を共にする。終つてから日本人墓地で慰霊を行う。ここは一月に詣でた所であったがまた感激一入であった。なお前回見損じた旧日本軍の防空壕跡その他を見てから飛行場に行く。

一〇時、米軍の輸送機(英国製ショート・エアクラフト三三三型機・三〇席・双発ターボプロップ機)に便乗させて貰いルオット島へ向う。途中クエゼリン環礁の浅瀬に旧日本軍の潜水艦が座礁し、司令塔と船体の一部が望見されたが、これは昭和一六年一二月作

戦行動中荒天のため座礁沈没した呂六〇号で、乗員は全員母艦迅鯨に収容された由。

二五分程の飛行で機は、小雨降る中をルオット島に到着、直ちにバスで墓地に向う。同島はクエゼリン本島よりは小振り、空から見ると一本の白い滑走路が中央に走っており、他は椰子の林(戦後は一本も残っていない)であったようであるが、今では結構繁つていて、バラボラアンテナとリーダードームが目立ち、建物が林の中に点在する程度で素人目には何の変哲もないように見受けられた。この小さな島に三千人もの日本海軍が立籠もり、大した防護施設も攻撃兵器もない所で猛烈な砲撃を受け、航空機は一日で壊滅魚雷、爆弾、燃料も相次いで爆発焼失してしまつた後、強力な上陸軍の猛攻を受けたのはどうにも抵抗のしようがなく無念の涙を飲まれたことと唯々御冥福を祈るばかりであった。現在同島には旧日本軍の司令部跡かと思われ、鉄筋コンクリートの建物が砲撃の凄まじい傷跡を残して今にも崩れそうな状態で残っている程度で、島はすっかり整地され昔の面影は無くなっているものと思われた。

飛行場からバスで数分の所に四、五〇坪の地域を白く塗った背の低い木柵で囲み、入口とその反対側の両方に白い笠木を持った赤い柱のコンクリート製の鳥居が建てられ、入口の鳥居の笠

木には和英両文字で日本墓地と書かれ入口に近い所に設けられたコンクリート製の碑には菊の御紋章の下に「ロイ・ナムルの防衛のために生命を捧げた日本軍将兵ここに眠る」と英文で書かれた銘板が取付けられていた。(二五年のあゆみ「口絵参照」)墓苑はよく手入れされた芝生で、柵に沿って是小さな花をつけた灌木が植えられていた。

我々一行は早速簡単な祭壇を墓碑の前に設けハワイからの赤いアンセリウムの花を飾り持参の供物をそれぞれ供えた後線香や蠟燭を点し、会長の持参されたテープレコーダーの「国の鎮め」の奏楽の下一斉に黙禱を捧げた。終つてから「海ゆかば」を聞きながら銘々でお祈りをした。これで戦後四四年にして初めて親しく英霊に見えることができ、長年にわたる念願が果せ感無量なものがあつた。なおこの墓苑は戦後間もなく、日本人が全く関知しない間に退役米陸軍大佐 F・H・セルフィーニ氏が独力で建立された由で誠に感謝に耐えない次第であつた。さらに当日の我々のため、わざわざ水飲み設備を墓苑内に持ち込んで居られた細心の配慮には、先方の親切がつくづく身にしみるものがあつた。

墓参終了後一二時三〇分ルオット島に別れを告げ、一二時五〇分クエゼリン島着、早速基地内のヨック・ユック・クラブで司令官と昼食の会食、終つて基地内のメーシー百貨店で時間外の

ショッピングをさせて頂き、一五時三〇分空港ビルへ移動、ここでハリス司令官より別れの挨拶、会長の謝辞があり、別れを惜しみつつ一六時五分発のコンチネンタル航空の九五六便(B七二七型機)で一路ホノルルに向つて飛立つた。

(筆者は元明治大学工学部教授)

長 男 田 賀 将 一

八月二五日 マジュロ島のロバート・レイマスホテルで午前二時起床。三時にロビーへ集合して、待望のルオット島に出発。マジュロ空港には、現地に住の山村様をはじめ沢山の方々が見送りに来てくださいました。また島田様の奥様からは、父のために丸一日かかって作ってくださったという手作りのブルメリヤの花輪をいただき本当に感激致しました。それに日の丸弁当や五目御飯でつくったおにぎり等もいただきました。前回同様本場に現地に住られる方々の我々に対するお心遣いから感謝申し上げる次第です。

午前四時三三分、小さなプロペラ双発のチャーター機に乗り離陸。外は真つ暗で、何も見えません。一路クエゼリンへ。午前五時五五分、予定より一五分遅れてクエゼリン空港に到着。ハリス司令官が自らタラップの下にて、我々を迎えて下さいました。そして私を見るなり「良く来た。貴方は一月の約束を果たしてくれた。私は再びの訪

問を心より歓迎致します。」とおっしゃり温かい握手をしていただきました。また六時という早朝にも拘わらず朝食会にも参加されびっくり致しました。日本では考えられないことですね。

朝食後、小雨の降る中をバスにて島内一周後午前八時墓地にて慰霊祭をとりに行なう。半年前この場所にて、あと九〇km先のルオット島には行けず涙をのんだことなど、さまざまな思いがこみあげて来ました。慰霊後前回は見なかつた日本軍のトーチカ跡を二カ所見せていただく。当時の戦闘の激しさを今もそのまま語っておりました。一〇時一五分、重量の関係で荷物を必要最少限に制約されて、米軍のショート・エアークラフト機にてルオットに向けて離陸。いよいよ夢にまでみたルオットだと思ふと熱いものが胸にこみあげてくるのをおさえることは出来ませんでした。点々と続く島影。とても美しい環礁です。

この美しさを表現する言葉はどこにもないでしょう。このような美しい所が本場に……本場に戦争などというものがあつたのでしょうか。

そのような思いも、眼下に真っ赤に錆びた艦尾の部分のみが座礁している、日本の潜水艦の残骸を見て現実を引き戻されました。米軍のバイロットが、その上空を二度も旋回して下さいました。

クエゼリンと同様にルオットに近づくにしたがい小雨が飛行機の窓を打ちます。そんな時、小雨の中にかすかに見える島影はまさにルオット島です。何年も見続けた写真と同じあの双子の島影です！興奮の中一〇時三五分ルオット島に着陸。お父さん、とうとう来ました。やっと来ました。外は雨が降り続いていきます。まるで父が我々を迎えて感涙に咽んでいるように。直ちにバスに乗り換えて墓地へ。

墓地は、大きな二つのバンカーの前に七、八本の椰子の木をバックにして二つの真つ赤な鳥居(正面と裏の方)を備え、苑内はとも手入れの行き届いた芝生敷で、手前正面の中央には碑が建立されており、その碑には英文にて「ロイ・ナムル(ルオット島)を守るために勇敢に戦つた日本兵士達がこの眠る」と刻まれておりました。早速、島田さんからいただいたブルメリヤの花輪、ハワイより持ち込んだアンセリウムの真つ赤な花や皆様銘々遙々日本より持って来たお供え物を供え、お線香、蠟燭をともした上「国の鎮め」の曲の流れる中一同揃つて黙禱を捧げて英霊の方々の御冥福を祈りました。この頃に不思議と雨も止み晴れ間も出て来ました。きつと英霊の方々も我々の元気な姿を見て安心されたためでしょう。銘々がお祈りをし靖国の御神酒、御神水をはじめ、なつかしいでしょう日本の沢山の供物を差し上げ

心ゆく迄四五五年の想いを英霊と語りました。

お父さん、私達は、貴方の尊い犠牲のお蔭で今こうしてとても幸福に暮らしております。どうぞ、ご安心下さい。そして、安らかに眠り下さい。

後髪を引かれる思いで墓地をあとにする。名残はつきませんでした。我々に与えられた時間は二時間です。

ルオット空港への途中の道端に日本軍の司令部跡と思われる建物が、当時の壮絶な戦闘を物語るべくそのまま保存されていた。胸のつまる思いでした。

また空港のロビーの片隅には日本の兵隊さんの遺品が五〇〇六〇点近く飾り棚に入れられて展示されてありまし



クエゼリン墓苑

た。せめてその一部でも良いから我々遺族会にて永久保存できないものかと思いました。一二時三〇分万感の思いを胸にルオットを離陸。機内より滑走路近くの墓地の真つ赤な鳥居が良く見える。英霊の方々が手を振って我々に別れをいっているように思いました。

帰りの飛行機の操縦席に私が皆様を代表して座っても良い、また写真撮影も自由と聞かされてとても感動致しました。操縦席からの離陸はとても緊張をしい興奮致しました。そして、上空から見るルオットは巨大なバラボラアンテナや大小の白い丸いレーダードームがあちこちに見えます。まさにハイテク化された超近代兵器を備えた軍事基地との印象を深めました。

何故入島が困難なのかがかかるような気が致しました。これが最後かもしれないと思うと矢も盾もたまらずキャプテンにもう一度上空を旋回して欲しいとお願いと快くOKのサイン、地上局の許可を取り、それも二回も旋回していただきました。さようならお父さん、さようなら二九〇〇余名の英霊の方々……。また来ます。必ず来ます。それ迄どうぞ安らかに静かに眠り下さい。

最後にこの度の慰霊巡拝に当りまして佐藤会長、ハリス大佐、デボラ・フルトンさん、マリアンヌ・ディオンスさんそして、マジュロの方々、遺族会と日通の皆様、また、目に見えない所

で御努力と御苦勞をお掛け致しました関係皆様方のお蔭をもちまして無事目的を果たし、帰国することが出来ました。ここに心より厚く御礼申し上げますと共に、今後とも、宣敷く御指導御鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

弟 金子 庄之助

今回、図らずも宿願のロイ、ナムルの島の現地慰霊が叶えられたのも、歴代の会長、並びに役員の皆様のご尽力と現地在住の多数の方々のご援助により更に陸軍大佐、ハリス司令官の恩讐を越えた仁愛と、人類愛によって実現したもので、以上の方々に深甚なる謝意と敬意を表する次第です。

特にハリス司令官には、早朝、薄暗いうちに水浸しのクエゼリン空港にチャーター機が着陸し、タラップを降りる団員、一人、一人をまるで旧知の友を迎えるような温かい握手で、お出迎えていただき、その上、二度に亘る同席の食事等、色々とご接待を蒙り、人間味溢れるお人柄には、唯々感動と恐縮の極みでした。

朝食をパンフィック・ダイニングルームで司令官と共にし、同島の日本人墓地で慰霊祭を行い、最終目的地、ロイ、ナムルに向う。

飛行二〇分程で目指す島が見えて来雨に霞む洋上に墨絵をみるような佇

である。

近づいてよく見ると、椰子林の中央を滑走路が長く延び、海、陸共に血潮で彩られた島とは信じられないような静寂の島である。

戦史叢書に拠れば、亡兄は、二八一航空隊に属し、艦上戦闘機二十五機で編成された同隊は、ルオット島に配置され、昭和十九年二月六日米軍と交戦玉碎戦死という。兄が居た島、そして散華した島、兵舎は、飛行場は、どの辺りにあったのかと想いを巡らしているうちに着陸、兄達が踏みしめたであろう大地に降り立つ。

出迎えるのバスで一路墓地に向う。途中から雨は一段と激しくなってきた。この雨は、四十有余年、夢想だにしなかった肉親縁者の来訪を迎える英霊の歓喜の涙が雨となって降り注いでいるように感じられる。時折、曇った車窓を雨が叩く。

やがて墓地に到着、米軍貸与の雨傘各自持参の雨具で身支度し、供養の品を墓地に運ぶ。

初めて見る墓地は清掃され、広々とした墓地の中に立派な墓碑まで建立されている。

環礁第二十四号に、ルオット戦に従軍された、セルフィニという方が、日本人墓地を建設され、祭典、管理、清掃まで執り行っていたのを読み、遺族の一人として、一言お礼を申し上げたい

と思っ て いた じ ゃ が、今 回 は お 会 い す る こ と が 出 来 ず 誠 に 残 念 で し た。紙 上 を 借 り て 衷 心 よ り お 礼 を 申 し 上 げ ま す。

此 処 に 眠 っ て お ら れ る 約 三 千 の 英 霊 も、こ の 人 道 的 お 計 ら い に 今 は 安 ら か な 眠 り に 就 い て い ら れ る だ ろ う と 心 温 ま る 思 い で し た。

慰 霊 祭 は 降 り し き る 雨 の 中、靖 国 神 社 の 神 饌、遺 族 会 団 員 持 参 の 供 物 を 供 え、蠟 燭、線 香 に 火 を 点 ず る も、雨 と 風 で、な か な か 点 火 し な かつ た。や っ と 準 備 が 整 い、一 同 黙 禱 を 捧 げ、後 は 順 番 に 礼 拜 す る。

墓 前 に 額 づ き、合 掌 す れ ば 万 感 胸 を 去 来 し、雨 涙 混 交 し 頬 を 伝 う。暫 し 英 霊 の ご 冥 福 を 祈 り 次 の 方 と 交 代 す る。慰 霊 祭 が 終 り、後 片 付 が 終 る 頃、降 り 続 い て いた 雨 が 不 思 議 に 止 ん だ。今 日 の 雨 は 英 霊 と 遺 族 の 涙 が 雨 と 化 し て 降 り 注 い だ と 思 惟 す る。

そ れ よ り 雨 が 上 っ た 島 内 の い た ま し い 戦 跡 を 巡 歴 し、後 ろ 髪 を 引 か れ る 思 い で ロ イ・ナ ム ル に 別 れ を 告 げ、ク エ ゼ リン に 帰 着、昼 食 も ク ラ ブ で 司 令 官 と 共 に し、記 念 撮 影、団 長 の 挨拶 等 あ り、司 令 官 以 下 お 世 話 下 さ れ た 方 々 と 固 い 握 手 を 交 し、お 見 送 り を 受 け 帰 途 に 就 く。

積 年 の 望 み で あ っ た ロ イ・ナ ム ル 島 ク エ ゼ リン の 現 地 慰 霊 の 旅 も、多 く の 人 々 の 善 意 に 支 え ら れ 無 事 終 了、団 員 一 同 元 氣 で 帰 国 で き ま し た こ と は 御 同

慶 の 至 り で す。

尚、こ の 旅 行 を 担 当 さ れ ま し た 日 通 の 皆 様 に も 色 々 と お 世 話 い た だ き ま し た こ と を 感 謝 申 し 上 げ ま す。

妻 佐 藤 敏 子

こ の 度、マ ー シ ャ ル 方 面 遺 族 会 の 御 尽 力 に よ り、ク エ ゼ リン、ル オ ッ ト の 慰 霊 巡 拜 に 参 加 出 来 ま し て 本 当 に あ り が と う ご ざ い ま し た。ル オ ッ ト は ア メ リ カ の 重 要 な 基 地 な の で、生 涯 望 み が 無 い も の と 思 っ て お り ま し た と こ ろ、佐 藤 会 長 さ ん か ら の 御 連 絡 で、ハ リ ス 司 令 官 よ り ル オ ッ ト 墓 参 の 許 可 が 得 ら れ た こ と を 知 り、夢 か と ば か り 喜 び ま し た。考 え て み ま す と、年 齢 的 に 身 体

の こ と が 気 に な り 色 々 迷 い ま し た が、子 供 達 も す す め て く れ た の で 此 の 機 会 に と、と う と う 決 心 致 し ま し た。

八 月 二 十 三 日 午 後、靖 国 神 社 と 千 鳥 ケ 淵 墓 苑 に 参 拜 し て 旅 行 の 無 事 を 祈 願 致 し ま し た。成 田 空 港 を 午 後 七 時 離 陸 翌 日 は ハ ワ イ の ク ヒ オ ホ テ ル に 一 泊 後 一 路 マ ジ ュ ロ へ 飛 び ま し た。私 は 馴 れ ぬ 旅 行 に 気 分 が 悪 く な り ま し が、幸 い 同 行 の 金 子 先 生 に 治 療 を し て 頂 き 元 氣 に な り ま し た。又 同 行 の 皆 さ ん の 励 ま し に よ っ て 旅 行 を 続 け る こ と が 出 来 ま し て 心 よ り 感 謝 し て お り ま す。マ ジ ュ ロ 島 内 見 学 後、夕 食 会 が 開 か れ て 日 系 の 方 達 も 大 勢 列 席 さ れ、テ ー ブ ル を 囲 ん で な ご や か に 懇 談 が 交 さ れ ま し た。

二 十 五 日、い よ い よ ク エ ゼ リン、ル オ ッ ト へ。身 も 心 も 緊 張 し て 出 発。ク エ ゼ リン で は ハ リ ス 司 令 官 の お 出 迎 え を 受 け、と ち も お 偉 い 御 立 派 な 方 と 印 象 強 く 感 じ ま し た。平 和 を 願 う 優 し い 欲 迎 の お 言 華 に 感 動 致 し ま し た。椰 子 の 木 が 茂 る ク エ ゼ リン の 墓 地 に 黙 禱 を 捧 げ、御 冥 福 を お 祈 り し ま し た。小 型 機 で い よ い よ ル オ ッ ト へ。機 上 か ら 遙 か 右 手 に 潜 水 艦 の 残 骸 が 波 に 洗 わ れ て い る の を 見 た 時 は 思 わ ず 涙 が 出 ま し た。二 十 分 で 到 着、司 令 官 お 心 尽 し の 冷 た い 水 と 紙 コ ッ プ が 用 意 さ れ て いた の に 驚 き ま し た。時 折 ザ ー ツ と 来 る ス コ ー ル は 直 ぐ 止 ん で 爽 や か な 風 が 気 持 良 く、椰 子 の 葉 が ゆ れ て い ま し た。海 の 辺 り は 椰 子 が 茂 り、コ ン ク リ ー ト の

道 路 を 挟 ん だ 芝 生 の 中 に 墓 碑 が 置 か れ て い ま し た。赤 い 鳥 居、白 く 塗 ら れ た 低 い 木 柵 で 周 り を 囲 み、き れ い に 清 掃 さ れ て い ま し た。と う と う 来 ま し た よ

と 心 で 叫 び な が ら、持 参 し た 花 環、赤 い ア ン セ リ ウ ム の 花、ロ ー ソ ク、線 香、各 自 持 参 の お 供 物 等 を 飾 り、そ れ に、「国 の 鎮 め」奏 楽 テ ー プ が 流 れ、一 同 「海 行 か ば」を 心 の 中 で 歌 っ て 英 霊 を 慰 め 御 冥 福 を 祈 り ま し た。そ の 間 雨 が ポ ツ リ ポ ツ リ と 降 っ て 涙 の 雨 の よ う で 悲 し く な り ま し た。司 令 部 ら し い 建 物 が 弾 痕 も 痛 々 し く、壁 や 入 口 附 近 は 落 ち、錆 び た 鉄 筋 が む き 出 し に な っ て い る 姿 は、当 時 の 凄 ま じ さ が 窺 え 胸 が 痛 く な り ま し た。想 い 出 が 走 馬 灯 の よ う に 馳 け め ぐ る 中 を 永 の 別 れ を 惜 し み な が ら 島 を 離 れ ま し た。今 は 身 も 心 も す っ き り し て 心 残 り は ご ざ い ま せ ん。同 行 の 皆 様、ほ ん と う に 有 難 う ご ざ い ま し た。

正 誤 訂 正

☆ 昭 和 39 年 2 月 発 行 の 小 冊 子 「ク エ ゼ リン 島 の 今 と 昔」24 頁 と、環 礁 23 号 に は さ み こ ン だ 「戦 記 シ リ ー ズ」7 頁 中 の 「連 合 艦 隊 旗 艦 大 和」を 「連 合 艦 隊 旗 艦 武 蔵」と 訂 正 し ま す。

☆ 環 礁 51 号 11 頁 2 段 中 「不 慮 の 戦 死 (四 月 十 八 日)」と 訂 正 し ま す。



ル オ ッ ト 墓 苑

妹 西 森 サツキ

四十五年目にしてやっとルオット島の墓参に参加させて頂き、これも佐藤会長を始め皆様方の御尽力、それにハリス司令官のご厚意と心温まる歓迎に深く感謝致しました。

いよいよ目的のルオット島に向けて出発、クエゼリンからルオット島までは約三十分、飛行機は低空を飛び、紺碧の海に環礁が眼前に広がり波静かです。素晴らしい眺めは筆舌に尽しがたいものがありました。

連絡が行き届いてか、待ち受けていた車で墓地に向う、とても綺麗に整理清掃されていて感激でした。

昨日迄天候に恵まれていたのに、墓地ではスコールに見舞われ、きつと英

霊達が嬉し涙で迎えてくれたのかも、涙と雨で頬を濡らしました。

お供物をそれぞれにお供えし、ローソクの炎の中で英霊の労苦を偲び、あらし日の面影を思い浮べ乍ら、鈴木さんと一緒に般若心経を誦読しました。

幸い雨も小降りになり、風もなくおかげでローソクや線香はとほり続けました。そして田賀さんが沢山の洗米を持って来て下さって居り、英霊の眠れるであろうその場に、日本のおいしいお米ですよと心をこめてまいてあげました。私も墓碑に水をたっぶりかけ乍ら四十五年前の事を今更のように想い出しておりました。

この島は当時日本軍航空隊の前進基地だったとか。兄は航空整備兵として勤務し、玉砕の前に特攻隊の親友と滑走路上で劇的な対面をしたことを知りました。愛機の故障でルオット島に不時着陸したその友は、兄とは幼馴染で同級生、然も家が隣り合せ、不思議な巡り合せに二人は抱きあったまま言葉もなく泣いたそうです。

その折の数少ない言葉の中に兄は、「ふる里の車井戸のうまい水をもう一度飲みたいよ」と言ったそうです。

稀有な再会をしたその親友は、間もなくルオット上空を飛び、ルオット玉砕を知り乍ら私の母には、「叔母さん、勝ちゃんは無事で頑張ってたよ」と慰め、公表がない丈に真相を語り得ぬ辛さに休暇を切上げて一日早く戦地に赴

いたと聞きました。

それから三カ月後特攻隊の彼は愛機の共々太平洋の空に散ったのですが、真実を自分の実兄だけに他言無用と打明けて散華した少尉の胸中いかばかりだったかと思うと、涙がこみあげてきます。

雨来四十五年やっと届けてあげるこの出来た「水」です。存分に飲んで下さいといっても返える声なく、でも長年の夢叶ったこの感激は終生忘れ得ぬ事でしょう。

この日を待てず四年前九十五歳で他界した母の墓前に報告しました。七人の子供の内唯一人の男の子であった兄はどの子よりも一番優しい親思いの子だったと母は死ぬまで言い続けていました。

二度と行けないかも知れないルオット島。英霊よ、安らかにやすみ下さい。

妻 川 越 コウ

昭和二十年八月終戦、その後、来る年も来る年も待ちわびておりました。

ルオット島への慰霊が許可されたとお便りをいただき、八十路に近い私は、年齢を思い今年こそは今年はと不安と焦慮の日々でございましただけに只々夢のような気が致しました。

許可して下さいました米軍司令官、御努力下さいました会長始め皆様様に感謝と感激で一杯でございます。

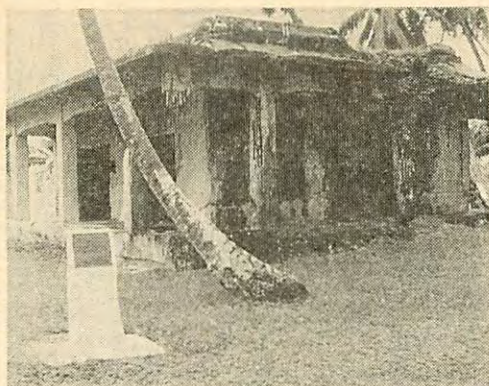
思えば十八年十二月暮、第一ホテルの玄関に未だ明けやらぬ五時前、海軍の迎えのバスが参りまして、鉢を窓より乗り出し軍帽を大きく大きく振り乍ら行きまされたのが最後の別れでございました。

あれから半世紀近く念願のロイ・ナムルの島が箱庭のように眼下に見えて来た時は、只涙で如何ともする事が出来ませんでした。果てしない太平洋の大海原に何んと美しい島でございました。

此の島が十九年二月、日米軍の真赤な血潮で染まったとは想像も出来ない緑の芝生に、目に沁みるような真白なブルメニヤの花が浮かび、故国にも咲くアフリカホウセンカが咲き乱れておりました。赤い鳥居、白い柵に囲まれた慰霊碑、今更乍らこんなに迄御配慮頂きました基地の皆々様の温かい御厚意に胸を熱く致しました。

私は亡き夫と二人の写真を、御都合にて今回不参加の井上様御兄弟御家族の写真、好物のカルカン酒など供えて安らかに御眠り下さいと祈り続けました。爆撃跡も生々しい司令部らしい建物に入りまされた時、此の中にこの土を踏んだであろうと慟哭し乍ら残せし品はないものかとある筈がございました。再び尋ね来る日の叶いますようにと只管祈りつつ。

家族一同老齢の事とて案じておりま



ルオットの戦闘指揮所(司令部?)

したが、御同行の皆様のおはげましと御助けにより無事望みの叶えられました事を改めて厚く御礼申し上げます。二月十一日にお詣りの時、皆様との御目もじを楽しみに致しております。佐藤会長様、役員の皆様有り難うございました。

美しきロイ・ナムル島よ睨なる

島は血潮に染みぬたりしに
海碧く芝生に白きブルメリヤ

雨に濡れつつ墓地に匂ふも
まことここに吾夫は玉と砕けしか

司令部の壁にすがりて慟哭す
遺骨なきがいとも哀しく石や砂

降り立ちしロイ・ナムル島は
雨なりき、吾等遺族の涙の如く

いつの日に又訪ひ得むや離れ行く
ロイ・ナムル島涙にかすむ

妻 田 賀 朋 子

夫をルオット島にて亡くした私は、この程、四十五年ぶりに而も二人の子供と共に念願の慰霊巡拝が出来ました事を、心より嬉しく一生の思い出に致したく思っています。

機上より見る南海の海は、言葉で言えない表わす事が出来ない程です。

点々と続くサンゴ礁の小島、こんなに美しい島で激戦が演じられたとは、とても信じられませんでした。

夫よ安らかに、おねむり下さいと祈りつつ、涙ながらにお別れしてまいり

ルオット遺品の一部



ました。有り難う御座居ました。

長女 牧 野 富美子

四十五年間、心に描いていた島への想いを秘めて成田を飛び立ち、途中ホノルルで一泊、マジユロで一泊、ようやく朝未だ暗い五時五十分、クエゼリンに着きました。

飛行機を降りたときたんたんの下ハリス司令官がお迎え下さり、慰霊の第一歩から深い感動を受けました。

出発前からハリス司令官のお人柄は聞いていたものの、タラップの下までのお出迎えをして下さるとは思いもよらず、父の眠っている島に一步近づいたという興奮と、ハリス司令官の人柄にふれ、胸が熱くなりました。クエゼ

リン、ルオットと墓参の間中、雨と風にもまわれましたが、誰も雨や風の事など気になさる方などなく、ただただ、ここまで来ることの出来た幸せを感謝し胸がいっぱいでした。

父の顔も知らず、ただ写真で見ただけの父でしたが、慰霊碑の前に立ちますと、父の顔が目に見え「よくやって来たな」と言ってくれているようで、言葉では言い尽くせぬ思いが致しました。

もっともつと居たい思いましたが、そうも行かず、あつと言う間にルオットでの時は過ぎ、父に何度となく「さよなら」を言い機上の人となりましたが、ここでもみなさんの胸をつくような事がありました。それは操縦士がルオットの島の上を二回も超低空で旋回して下さった事です。

最後にハリス司令官に御礼を述べました時も、「私は軍人として当然の事をしたまでなので、気になさらないで下さい」と述べられ深い感銘を受け、心の大きさを知りました。

ホノルルへ向かう飛行機がエンジントラブルを起こしマジユロへ引き返しましたが、これは英霊たちが「もう一晩マシーナル群島に泊まって行けよ」と、引き戻したのだから、と皆が異口同音に言いました。

ホテルがいつぱいで、ボランティアの個人の宅に泊めて貰いましたが、ベッドが足りなくて床にちかに毛布を敷

いてゴロ寝の人もいましたが、今朝からの感激と感謝の余韻の故か誰一人不満も言わず疲れを忘れて陽気に語り合い笑いあいました。そんな気持ちになることの出来た自分をととても嬉しく、ルオットに眠っている父が私の心をそっさせてくれたものと思ひ、日本に帰ってもこの心を持ち続けハリス司令官のようにならなり、そんな気持を我が子にも受け継げるような親でありたいと思ひました。

今回の墓参の旅で得たものの多い事を嬉しく思ひ、この墓参が叶えられるまでの佐藤会長の御苦心とハリス司令官の御厚意に深く感謝し、そして御一緒させていただきましたみな様、良い旅をさせて下さいまして本当に有り難うございました。

沖縄平和祈念堂に霊石奉納

沖縄南部摩文仁の激戦地跡に聳える白亜の平和祈念堂の地下に、霊石室があります。去る大戦で亡くなられた人々の鎮魂と、世界の平和を祈念するための霊場です。

昨年十月同地を訪れた会長他有志役員が、昨年一月と八月に南方で採集したクエゼリン、ルオット、ウオッセ、マロエラップ、マジユロ、タラワの各島の霊石(珊瑚礁片)を奉納しました。詳細は次号に報告いたします。尚、ルオット島の霊石及び各島の霊砂を御用の方は本部にお申込み下さい。

ブラウン環礁の玉砕 (3)

矢野雄三

陸海戦略思想の対立 (続き)

この陸海の「罅隙」の背景には、根本的にいわゆる野戦と海戦との差、つまりは「陣地」「拠点」を重視する陸軍と、拠点よりもむしろ「機動性」を重視し、戦場を己れの欲する海面に求めようとす海軍との「体質的な」相違があった、とみるべきであろう。

前掲の『真田稜一郎少将日記』に記されている陸海双方の緊迫したやりとりの中にも、海軍側の作戦指導と陸軍側の戦争指導的な離島防衛に関する価値観の相違がよく表われている。

大本営陸軍部の見解は、陸軍省(政府)の強い意向を反映しており、イタリアの戦線脱落、独ソ戦の憂慮すべき見通しなど欧州戦局での枢軸側の不振、太平洋戦争における雨季明け後のビルマ反攻およびインド洋からするアンダマン、ニコバルへの進撃予想、西部アリューシャンの失陥に伴う北辺からの脅威、船舶消耗の増大と戦力造成の困難さなどを背景に、国力と作戦規模との平衡を期しての主張であった。(公刊戦史)

聯合艦隊としては、何よりも現状の戦略態勢を崩すことなく、早期の決戦に持ち込まなければ、彼我戦力の懸隔は日を送って大となり、勝機は永久に去ってしまうという焦慮があったに違いない。「絶対国防圏」の設定と「南

東持久」の新作戦方針が、前線將兵の士気に与える影響、またマーシャル・ギルバート方面に対する陸軍側関心の低下を極度に虞れたことも、事実であろう。

しかし、陸軍側の考え方——補給困難な遠隔地域への部隊の投入は極力避け、戦争遂行上絶対不可欠でしかも陸海空の集中的な戦力発揮が確実な地域を確保して、十分な作戦準備を整え、そのうえで来攻する敵に一大反撃を加えようという構想からすれば、後方要線から突出するトラップを確保要域に入れること自体が問題であり、ましてマーシャル諸島を陸軍の「主陣地」とするなど論外のことであった。

海軍側の主張どおり、同方面での決戦で戦勢を一挙に逆転させるほどの戦果が得られればよいが、これまでの海軍の実績からみて「果たして聯合艦隊が出てくるかどうか」は疑わしい。むしろ却って貴重な戦力を消耗し、「絶対国防圏での反撃力」を弱める結果となる懸念があったからだ。(実際は、まさにそのとおりの展開になった)

一方、十八年夏頃から、陸軍部内にも新たな動きが台頭しつつあった。

それまでの太平洋正面における作戦指導では、海軍が主導的立場に立ち、陸軍は海軍側の要望に可能な限り応えながらも、主たる関心はソ満国境ないしは中国大陸にあった。

だが、いまや「絶対国防圏」の設定を前にして、海洋正面からの本格的な敵の反攻と真つ向から対決するには、陸軍側にも、新たな基本的な心構えをもって諸般の施策を強力に推し進めねばならぬ重大段階に立ちいたった、との認識が色濃くなってきた。

八月半ばになると——、陸軍部は「主敵は米国である。対米絶対国防圏を強化するためには、対ソ戦準備を犠牲にしても、これに全力を傾倒しなければならぬ」と、旗色を鮮明にしはじめた。

同年七月、米軍がニュージョージア島(ソロモン諸島)レンドバへ来攻するや、八月初め現地の第八方面軍から出された一〇師団増強の意見具申と海軍側の強い要請を受けた陸軍部が、その派兵を本末転倒と主張する陸軍省との激しい応酬の末、対ソ戦のため北支に温存していた第十七師団主力の南東派遣(九月十一日発令)に踏み切ることにしたのも、その一つの表われといつていいだろう。杉山参謀総長は本件上奏の際、トラップ島に第五十二師団の先遣部隊を投入することもあわせて上奏している。

そうした動きの中で、八月十四日か

ら数日間にわたった陸海合同の兵棋研究の席上、陸軍側の瀬島龍三少佐(作戦課主任参謀、のち中佐)は南東方面の見通しを含め、次のように発言している。

同方面の保持は、時間の問題である。したがって全般作戦指導方針としては、東部ニューギニア(東は極力持久を策し十九年春を目処として)パプアニューギニア、カロリン、マーシャル、マリアナ諸島の航空基地防空施設を概成しかつ航空兵力、「海上機動部隊」など陸海反撃戦力の整備に勤め、十九年以降連合軍の来襲に当たっては、陸海空の総力を集中してこれを洋上または上陸初動に撃破し、進攻企図を挫折させる。反撃正面はパプアニューギニア、カロリン、状況によってマーシャルとする。

右作戦方針遂行のため、所要の兵力をラバウル、ブーゲンビル地区に増強するほか、後方要線である西部ニューギニア、パプア海正面およびカロリン、マーシャル、マリアナ方面に来年三月頃までに戦略兵団(師団)を含む所要の陸軍兵力を増派する。(括弧・傍線筆者)

——この兵棋研究で、それまでの陸軍部内の研究では絶対確保線には含まれていなかった「マーシャル群島」が、戦備の主線に入ってくるのは、海軍側との接触の多かった主任参謀が、おのずと海軍側の意向を汲んだもののようにだ——と「公刊戦史」は記している。

また、この重要兵棋において瀬島参謀が、初めて「海洋編制師団」ないしは「海上機動旅団」という新構想を明らかにし、重点前衛線への急派を提唱したことも、本稿にとってきわめて重大な意味をもつ——。

八月二十一日には、陸海軍部の部長以上が軍令部総長官邸に会同した際、真田稜一郎作戦部長がそれまでの研究結果を要約して、最終「二案」を提示

している。

A 案 国家総力を投入して南東現戦線を死守する(現戦線で決戦する案)
C 案 極力敵を撃破して持久を策しつづつ某時機、計画的反攻を企図する(現戦線では持久、後方要線で決戦する案)

海軍の意見は今までと変わりがなく、A 案に近い C 案——すなわちラバウル地区を極力確保し、その間有利な決戦の機を捕捉しようとするものであった。その理由は、ラバウルを失えば間もなく聯合艦隊主力の位置するところがなくなり、燃料の関係から南西方面に退かなければならぬ。ラバウルの防備は他方面に比べると最も有効で、ここが破れたら太平洋戦争は総崩れと考えねばならぬ。後方拠点として西北部ニューギニアも十分な自信はない。かといってラバウルも一〇〇パーセント大丈夫とはいえないので、あくまで保持するためには、他の戦線を犠牲にしても全航空兵力を注入しなければならぬ。ラバウルにはできる限りの戦力を注入して持久を策し、残りの力をトラックに入れるというのである。また、後方要線(ニューギニア北西部、カロン、マリアナ等)は、この線で米攻軍を邀撃するのではなく、前の線(現戦線)に引つかかっている米軍を叩くために、反撃戦力を蓄積する足場であると主張した。(『真田少将日記』)

以上、数次にわたる検討の結果、八月二十四日、大本営は「現戦線ニ於テ持久ヲ策シ、コノ間後方要線ノ戦備ヲ固メ、明年春頃マテニ反撃戦ヲ準備スル」旨の作戦方針変換を、内定する。

だが、後方要線については、陸海軍間でまだ調整がついていたわけではない。とくに問題は中部太平洋のギルバート・マーシャル諸島、トラック島の扱いであった。海軍側は、マーシャル・ギルバート方面をきわめて有利

な決戦場と考え、同方面で米艦隊を捕捉撃滅しようという構想を依然捨てておらず、作戦方針の転換に基づく後方要線の選定そのものには同意したが、マーシャル、ギルバートはできる限りこれを確保するため、陸軍部隊の派兵を強く要望した。

だが、それらの離島防衛がいかに多くの犠牲を強いるものであるか——は海軍自身が誰よりもよく知っていたことではなかったのか。

海軍側が呼号する「前方決戦」方式によれば、聯合艦隊がその決戦海域へ駆けつづけるまでの少なくとも数日間、邀撃帯にある各離島守備隊はなお健在にして、当面の敵艦隊主力を付近海面に拘束していることが要求される。離島守備隊としては、絶対優勢な敵の来襲に対して少なくとも数日間は、これに耐え抜くことができなければいけないことになる。

そのことは、トラック在泊中の旗艦「武蔵」で開かれた内南洋部隊の作戦会議(五月八日、既述)に続く、その夜の夕食会での突っ込んだ質疑応答によっても明らかといえよう。

席上、第六根拠地隊(クェゼリン環礁に司令部を置く海軍陸戦隊)の先任参謀・林幸市中佐は、聯合艦隊主席参謀・黒島亀人大佐に向かい、「マーシャル・ギルバートに敵攻略部隊が来攻した場合、聯合艦隊の支援は可能であるのか。可能な場合、現地は何日間持

ち耐えればよいか」と質問した。

「その回答に曰く、最悪の場合でも七日だ。聯合艦隊は必ず支援に行くから待っていてくれ。戦況まさに不利であり、まことに苦勞だが、この旨を現地部隊に伝えてもらいたい。最後まで奮闘を切望する」(公刊戦史、傍線筆者)

だが、果たしてこの時期の日本海軍に、見敵必殺の力がなお残されていたのだろうか。

しかも陸軍としては、絶対国防圏確保の新作戦方針が大量の陸兵派遣を前提とせぬ限り成り立たない以上、大規模な陸兵派遣に踏み切らざるを得ず、不気味に対峙するソ連軍に配慮しながらも、極秘裡に陸軍の誇る最精鋭の関東軍、ないしは支那派遣中の精強兵団の多くを抽出し、海洋・海上編制に重装備化したうえで急遽、太平洋戦線の重点地域に派兵することになる。

これらの派遣兵力は、陸軍側の解釈によれば当然、カロン、マリアナ諸島の絶対国防圏「要域」に重点配備されるべきものであったが、その本来の主張にそって、これらの精鋭部隊を国防圏の強化のために投入しようにも、戦局の展開は、その強化に要する時間的余裕すら疑問視されるまでに急迫しており、また中部太平洋上の前方要線を強固な邀撃帯とし、トラックを決戦海上兵力の根拠地として前方海域での敵邀撃を策するのが、国防圏維持には最良——とする海軍側の強い要請に引

きずられて、結局は、後方強化のための兵力をやむなく前方に割くことになっていく。

陸海軍両部の数次にわたる折衝を通じて、これら陸軍兵力のかなりの部分が絶対国防圏の前衛線——マーシャル諸島およびマーシャル・カロン諸島間の離島防備に当てられることになるのである。

中沢佑海軍中将(軍令部作戦部長、当時少将)の戦後の回想録には、次のような海軍の反省がある。

——(前略)——この絶対国防圏の線を防衛の第一線として偵察、哨戒線を東経一四〇度(概ね小笠原、マリアナ、西カロン、西ニューギニア)として邀撃し、主力部隊は瀬戸内海に、前進部隊は横須賀又は沖繩、南西諸島にあって敵主力の来攻を待ち、敵一部、わが防衛線に來たらば、わが主力部隊は真ちに攻撃、西太平洋上において決戦せんとする構想であった。この規模が、わが軍備力に相応しい作戦規模であったのである。(中略)もしマリアナ方面の防備を先に着手し、海上輸送が意の如くできたならば、同方面の防備は約半年前に強化され、昭和十九年六月、敵がサイパンに來攻した時に有効な反撃ができ、惨敗することはないかと思う。(中略)海上に点在する重要な島嶼の防衛は、附近海域の制空・制海権を確保してはじめて成立することを自覚して、わが航空兵力の現況及び水上艦艇兵力の不如意を弁へ、徒らに陸軍兵力増強を要求すべきではなかったと思う。此の点、制空・制海権の重要性を知る海軍としての不明を反省せざるを得ない。(傍線筆者)

それにしても、何故に陸軍部は、戦争指導的見地に立った自らの見解と主張から、かくも安易に後退してしまわ

めて不徹底であったとの誹りは、免れ得まい。

海上機動旅団

マーンシャル海域への陸兵派遣は、同年十月四日、杉山参謀総長の上奏内容に盛り込まれ、十一月八日の『陸海軍覚書』によって決定的となった。

中部太平洋方面への陸兵派遣に伴う覚書では内地、満鮮、支那など各方面から抽出した歩兵約四〇〇大隊を基幹とし、これに所要の砲兵、戦車、対戦車砲、工兵を配属した陸軍兵力（海上機動第一旅団、南洋第一支隊）第六支隊、独立混成第五部隊）を転用、または新設派遣することを決定している。

- マーンシャル諸島に海上機動旅団一〇
- カロリン諸島（トラック地区）に第五十二師団（在金沢）と海上機動旅団一〇
- マリアナ諸島（グアム、サイパン、テナアン地区）に第十三師団と海上機動旅団一〇
- 右海上機動旅団三〇のうち一〇は満州、他は内地で編成派遣
- 別に、マーンシャルからカロリン南部にわたり、南洋支隊六〇を配置する。
- 南洋支隊六〇のうち一〇は、すでにマーンシャルに配置中の歩兵第十二師団（既述、第六十五師団麾下）をもって現地編成、他の二〇は満州、三〇は内地で編成派遣する。

一、方針

イ、陸軍部隊ノ団結ヲ維持シ得ル範圍ニ於テ島嶼ノ防衛ニ適スル如ク編製ヲ決定ス

- ロ、人馬ノ数ハ極力減少シ裝備ヲ可及的優良ナラシム
- イ、師団ハ歩兵聯隊ヲ、支隊ハ歩兵大隊ヲ単位トシタ編制ヲ採用ス
- ロ、師団編制中主トシテ海上機動ニ任スヘキ歩兵聯隊又ハ独立セル海上機動部隊ハ艦艇ニ依ル輸送容易ニシテ迅速軽快ナル反撃ヲ可能ナラシムル如ク戦力ヲ具備セシム
- （島嶼守備主体の南洋支隊は略）

ここに、それまでの日本陸軍編制史に存在しなかった新設の『海上機動旅団』が誕生するが、この構想が南方作戦担当の瀬島主任参謀によって進められていたことは、すでに述べた。

その特徴は、編制内に海上輸送用の舟艇をもつ点であり、海洋離島作戦において戦略・戦術的な反撃または増援などに任ぜしめることを狙いとする。

当時の戦況推移下にあつて「戦略守勢、戦術攻撃」の方針のもとに現占領要地を確保するためには、守備兵力を多方面に平均して十分に配置するだけの余裕はない。また、連合国がいわゆる「蛙飛び」作戦によってわが方の防備嚴重な要地を素通りし、防備の薄弱な地点に上陸、拠点を確保しながら航空基地を建設——順次進攻するという図式の反攻作戦を展開するに至ったことから、それへの対応策として生まれたいものといわれる。

すなわち、敵が上陸地点に地歩を築く前に、迅速に所要地点に反撃兵力を逆上陸させて敵の企図を粉碎し、または予期せぬ方面に敵の上陸を

迎えたとき、急速に同方面に兵力を増援するためには、海上機動力をもつ強力な兵団を扇のカナメと目される要地に進出待機させておく以外に方策はない、としたのである。

要するに、旅団の全力をもって幅広く海上から機動逆上陸、斬り込みを執行させようというもので、そのための装備は極力優秀に、かつできる限り多くの戦車を配備して「日本陸軍最強兵団」とし、これらを絶対確保を要する防衛圏内に配置することにより、主軸となる航空兵力とこの海上機動反撃力との併用による有効な反撃決戦態勢を構築しようというのである。

かくして、マーンシャルへ派遣の『海上機動第一旅団』は、同年十一月十六日、軍令第六六号をもって下令、関東軍司令官の隷下にあつてチチハル（黒龍江省）地区の任務に就いていた「満州第三独立守備隊」（長・西田祥実少将）に、編成の命が下った。

だが、早くも十九日早朝、ギルバート諸島の要衝タラワ・マキンが大規模な米機動部隊の空襲にさらされ、二十一日未明には優勢な敵攻略部隊が大挙、上陸を開始してきた。太平洋方面における連合軍総反撃の「序曲」ともいべき第一撃であつた。

聯合艦隊の「ブラウン」進出

米軍が、ギルバート方面をねらう気配は、すでに九月から現われていた。

思うに、昭和十八年夏には、敵が奪還したアリューシャン列島の守りはすでに固く、南太平洋および南西太平洋への重要な補給線も航空・艦隊基地の適切な配備によって十分に防備され、少なくとも戦略的には米軍が太平洋において「守勢」であつた時期は、終わろうとしていた。

南東方面では、連合軍の熾烈な追い上げの前に、わが方は艦隊および航空兵力の甚大な消耗戦に喘ぎながら、ジリジリと後退を余儀なくされていた。同方面の戦場で日本海軍の主兵となつて戦つた基地航空部隊はもろろん、輸送に従事した駆逐艦、潜水艦を次から次へとすり潰しただけでなく、その間に多くの主要前進基地を失い、再び攻撃力を建てなおして再攻勢に転ずるパワーは、もはや喪われつつあつた。

同年七月には、米海兵隊と海軍建設大隊がギルバート諸島南方のエリス諸島を占領して爆撃機基地の建設を開始し、九月初めには航空工兵大隊がギルバート東方四八〇哩の米領ベイカー島に上陸、カントン島にある爆撃機基地をバックアップするための戦闘機用飛行基地を建設した。

この頃から、米機動部隊も蠢動を開始する。九月一日南鳥島を、十二日千島を空襲した米軍は、十八日から十九日にかけて三隻の空母部隊とカントンおよびフナチ基地の陸軍航空部隊が連携して、ギルバート諸島のタラワ・

マキンに大空襲を加え、ニューギニア方面では二十二日、フィンシハーフェンに上陸作戦を敢行した。

これらの一連の動きは、米軍の新たな企図を示唆するものであり、その作戦速度はますます加速化する情勢を示していた。(これらが、中部太平洋方面への兵力投入の大きな要因となる)

——その間、わが聯合艦隊は、いかなる行動をとっていたのか。

「武蔵」艦上での最初の訓示の後、古賀新長官は、中央首脳部との打合せのため五月二十三日、乗艦を横須賀に回航した。東京会議出席の目的の一つは、前任者の作戦方針に束縛されることを望まず、その所信に対する大本営の了承を得るところにあったという。

戦後、福留中将(時の聯合艦隊参謀長)は、「合衆国戦略爆撃調査団」の質問に答えて、こう証言している。

「古賀長官が私に語った作戦指導の基本原則は、艦隊決戦主義によることが戦果を期待し得る唯一の戦法であるという点にあった。作戦第一期を過ぎ、第二期に入らうとしていたこの時期は、消極的な防禦作戦に頼る段階ではなく、攻撃に出なければならぬ。艦隊決戦こそ唯一無二の目標とせねばならぬという確信をもっており、そんな決戦が昭和十八年中に起こるとすれば、少なくとも五割の勝算ありと考へていた。(中略)米艦隊は今北へ北へ押し上げてくるものと彼は判断しており、トラックに待ち構えていさえすれば、敵がどの点を攻撃してくるにせよ、北上してくる以上は、米艦隊との決戦の機会を作ることが可能だと思っていた。そこで彼は、一部から勧告されたように兵力の西方分派をせず、艦

隊の全力をトラックに集結した。米艦隊がやってくるまで待とうという戦法で、待つていさえすれば、敵艦隊は必ず所要海面に現われると信じていた」

八月十五日には、「聯合艦隊第三段作戦要綱」(既述)および艦隊決戦のための具体的な「Z作戦要領」が発令されたが、海軍側が、当面の決戦場を依然ソロモン海域に求めており、「絶対国防圏」の策定後もこの方針を捨てなかったことは、すでに述べた。

九月十七日、米側の通信情報の異常を察知した古賀長官は、トラック在泊中の機動部隊、遊撃部隊に対しマインシャル方面への進出を下令、第三艦隊司令長官・小澤治三郎中将は機動部隊、遊撃部隊を率いて十八日トラックを出動、不時の会敵に備えながら、Z作戦要領による訓練を実施しつつ二十日、日本海軍の最も有利な作戦基地である「ブラウン環礁」に艦隊を進めた。

次いで、敵機動部隊のギルバート空襲を重視した古賀長官は十九日、「丙作戦第二法警戒」(マインシャル方面に敵来攻の場合のZ作戦)を発令、トラックに残留中の空母「瑞鳳」と第四駆逐隊も直ちにトラックを出撃して艦隊主力に合流すべくブラウン環礁に向かったが、その後米機の来襲はなく、また内南洋方面航空部隊も米機動部隊を発見するに至らなかったため、十九日午後、機動部隊および遊撃部隊に対しブラウン待機を命じた。

然るに、二十二日になっても敵情は得られず、米機動部隊はすでに退去したものと判断した聯合艦隊司令部は、丙作戦第二法警戒を解き、同部隊のトラック回航を下令した。

——また、約半月後の十月六日には六隻の空母群から成る米機動部隊(過去最大規模)が、わが哨戒の間隙をついてウェーキ島を急襲、延べ四〇〇機による大空襲と艦砲射撃を強行し、翌七日午前にも空母機が再び来襲した。

聯合艦隊司令部は、この空襲が南東方面への牽制であり、南鳥島、ギルバート方面への来襲と同様一日だけの空襲にすぎず、同島攻略の企図はないものと判断し、遊撃作戦を下令することなく事態を静観していたが、十六日午前八時、軍令部から「諸情報ヲ総合スルニ敵ノ有力ナル機動部隊中部太平洋又ハ本土ニ来襲ノ算極メテ大ナリ」との再度の警報に接し、同日、「丙作戦第五法警戒」(ウェーキ、マインシャル方面に同時に来攻する場合のZ作戦)を発令した。

——当時、聯合艦隊先任参謀だった高田利種大佐は、次のように回想している。

「聯合艦隊司令部は、敵艦隊に対する通信情報から米西岸(ハワイ間の移動ならんと判断し、敵機動部隊の来襲の算少ないとの情勢判断に入っていたが、再度中央からの警告電を受手するに及び、中央の情勢判断は聯合艦隊の情報以外のものを根拠としていた。やも知れずと考へ、中央の警報に基づき十六日、遊撃隊及び海上決戦兵力のブラウン方面出撃を下令した」

古賀長官直率の海上決戦兵力は、十

七日トラックを出撃、十九日再び「ブラウン環礁」に進出したが、二十二日夕刻になって軍令部は、敵来襲は誤断であったとして敵機動部隊に対する警戒を解いた。だが、古賀長官の在ブラウン決戦兵力は、そのままトラック泊地へ引き揚げることを潔しとせず、十数日前に敵機動部隊が二日にわたって入念に叩いていったウェーキ島西方に向けて、ブラウンを発進した。

この際、もし敵のウェーキ攻略戦が実施されれば、ミッドウェーとは逆の立場で米機動部隊を奇襲し、戦局を一挙に転回できると判断したからだ。

小澤機動部隊は二十四日、ウェーキ島南西二〇〇哩で付近一帯の綿密な飛行索敵を実施したが、敵情を得ず、二十六日、丙作戦第五法警戒を解除し、同夕刻トラック基地に帰投した。

——古賀長官の二度にわたる決戦意図は、いづれも不発に終わった。

十月二十六日、空しくトラックに帰投した聯合艦隊は、この出動で五万トンの燃料を消費し、トラック基地の重油タンクはほとんどカラになった。

しかも、決戦部隊がトラックに帰った翌二十七日、まさに追い討ちをかけるように、ブーゲンビル南端沖合の「モノ島に敵来攻」の報が入った。

ここを奪われたら、中部ソロモンは立枯れとなる。ラバウル基地からは、「第三艦隊」(空母機)への増援要求が相次いでいた。

△以下次号▽

妻 鈴 木 つ な 子

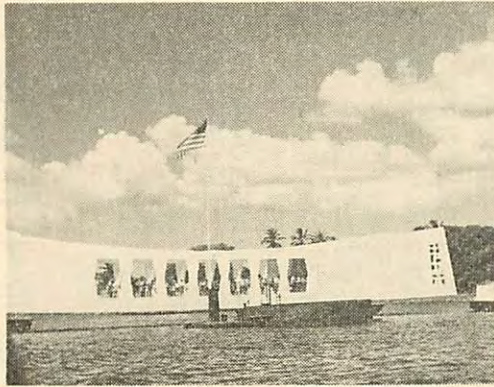
八月二十五日の朝露の中をクエゼリンに降り立ち、ハリス司令官の、手を取るような温かいお出迎えを受け、朝食を共に頂き、早々に身支度を整えて再び用意の飛行機に乗って一路ルオットへ向いました。

見渡す限りの蒼い海に静かに秘められたようにその島はありました。ほんの粟粒のような孤島です。四十五年前あのような事がなかったら、ここは神の楽園でありましたでしょう。

国の御楯として征った以上は、覚悟は充分であられたとは思いますが、所詮は人の子、時にはその寂しさに脅えた事もありましたでしょう。哀れさど無念に、言葉もなく胸たぎるのみでありました。墓地は浜辺の近くに緑の芝生も青々と、赤い鳥居も建てられ、二千余柱が丁重に祀られてありました。その日は雨が降り初め、恰も襖のように墓碑も私達もシトシトと濡れて、捧げられた灯明や、お香は如何かと案じましたがよく燃えて御霊様方の御喜びを知りました。会長様ははるばるお待ち下さったテープレコーダーの、国の鎮め々の調べを御英霊と御一緒に聞き入りました。今、祖国は大変栄えております。皆様がお命を懸けてお護り下さいましたお陰でございます。さあ御一緒に帰りましょう、日本へ。貴方の一年三カ月だった子も成人致しまし

て今は子の父親になっております。皆様待つております。と語りかけるのでした。

司令部跡も見せて頂きました。無惨に焼けただれた残骸に凄惨な戦闘をまざまざと知り、息も止まり涙も出ず、足がすくみました。折からの涙のような雨にその壁はいよいよ黒々と生々しく足下に繁る草は蛙のように靴下に、ズボンに吸いつき、焦土から蘇生したのも生への執着を思わせられ、げに戦とは凄まじきもの怖ろしきものと、只々冥福を祈り、平和を希うのみでした。許された時間も残り少なく、後髪をひかれる思いで機上の人となりました。さようならルオット！



ハワイ アリゾナ記念館

した。個人々々は皆よき人なのに、なぜあのような戦争がおこったのでしよう。

後になりましたが、此度ルオットに四十五年ぶりにて参拜出来るようになりました事は、会長様はじめ大勢の方々の御尽力のお陰でございます。厚く御礼を申し上げます。

弟 黒 川 直 吉

長年の念願であった、ルオット島墓参の望みが叶って、ほんとうにうれしかった。クエゼリンの墓参をすませ、待ちに待ったルオット島に全員無事に着陸した。約半世紀近く肉親の墓参がゆるされなかったルオット島の墓の前に立った時は全員が、ただただ涙々でした。若くして祖国の為に勇敢に戦って散った勇士の、かつての戦場跡、肉親同志が四十五年前の最後の地上に立つて故人に思いを馳せる。今こそ芝生が植えられてグリーンの美しい墓地になっているけれど、当時は今私の立っている所も激戦地で猛砲撃と爆撃等で、一秒たりとも立っていられなかつたんだらうなあとと思うと、万感胸にこみ上げ如何におさえても涙がこみ上げて止らなかつた。

靖国神社の御神酒、御神水、お菓子等ははるばる日本から持って来た故郷の好物もそれぞれお供えして、全員手を合せお祈りする。皆さんもそうだと思

まで長い間墓参りにこれなくごめんね、今日やっと来たよ。兄さんこれは家の井戸水だよ。兄さん、子供の頃よく飲んだり顔を洗ったらう、あの水だよ。」

もう目の前が涙で霞んで、ぬぐっても、ぬぐっても止まらなかつた。

英霊もいっしょに空の上で泣いてくれているかのように、雨が降ったり薄日が射したりしていた。涙雨と言うけれど、本当にあるのだなあーと思つた。全員で手を合せ祈る、ただただお祈りする。御霊の御冥福をお祈りし、長い間墓参ができなかったことをお詫びしました。

妻 猪 瀬 ナ カ

この度、ルオット島慰霊巡洋に参加させていただき誠に有難う御座いました。会長様始め会員の皆様、添乗員の方にお世話になり、厚く御礼申し上げます。

永い間の念願を果す事が出来、ホッとしました。これも会長様、司令官様、その他の皆様のおかげです。

本当に有難うございました。

ルオット島に着くまでは、どんな所で戦死され、そして埋もれている事かと胸を痛めておりましたが、美しい静かな所で安らかに、との願いを込めて建てられた立派なお墓を前にして、安心致しました。

どこの島の人達もやさしく温かく迎

激戦二十年後の戦跡 (3)

篤志会員 長谷川 敏

えて下さいまして、本当に頭の下がる
思いでした。
殊に朝早く司令官様のお出迎えにあ
づかり有難くて泣けました。
私は心に思っている事を総て書き表
わせず、もどかしくこんな乱文で本
当に申し訳ございません。
ありがとうございます。

妹 岩 田 とし子

昭和十九年二月の玉砕より待ち続け
ておりましたロット島の現地慰霊の
夢を叶えさせて頂きましてありがとう
ございました。

きれいな海の中の小島に、白い柵に
囲まれた緑の芝生の墓苑、鮮やかな朱
色の鳥居、重厚な墓碑、…この立派な
墓苑が日本人の全く知らない間に米
国の篤志家によって作られ、管理され
たと伺って頭が下りました。

ここがあのほげしい戦争のあった所
とはどうしても思えない静かさです。
折も折、雨が降りだしました。涙雨で
す。定められた時間の中でお詣りをし
て、バスで戦争の跡をめぐり、散華さ
れた英霊の御冥福をお祈りしました。

今年の一月にクエゼリンに、そして
又、この度ロットにお詣りさせて頂
き、永年の望みを果すことができまし
た。ハリス司令官様、会長様、同行の
皆様ほんとうにありがとう御座いまし

▲本稿は、筆者が昭和三十二年より同
三十九年まで南洋の島々をたびたび訪れ
たときの見聞録です。

6、タラワ環礁ペティオ島

ペティオ島の海岸に外見上、形だけ
が完全な八インチ砲が二門あり、今だ
に砲先は海の彼方をにらんでいた。こ
れらのある大砲には日英双方の文字
(環礁16号に詳報)が、また他の大砲に
は B. I. 8 IN. V. S. & M. 1905 NO
1084 の英文字だけがそれぞれ砲
門に刻まれていた。これら八インチ砲
は英国製だったのである。帰国後、
一戦時中、日本軍がシンガポールにあ
った大砲を徴収し、ギルバートへ運ん
だ」という話を聞いたり新聞で読ん
りしたが……。

島の西南端、外海側の海岸にある八
インチ砲はどういう訳か砲先は前方の
外海側を向いていず、後方の島内側、
つまり礁湖側に、砲身を水平にして向
いていた。しかも、その隣の弾薬庫の
コンクリートは直撃弾を受けたのか大
きな穴があけられ、何本もの鉄筋が露
出していた。島民の話によると、米軍
の舟艇は礁湖側に廻り込んできたので
島の三門の八インチ砲のうち一門だけ
が礁湖側向きを転換したものの、そ
れも一発撃っただけだった、とのこと

だが……。それはこの砲であったのだ
ろうか。

ある部落内の地面に1〜2m四方の
セメントがうたれ、そこに危険。こ
の下ファイートに二五〇ポンド爆弾あ
り」と英文で刻まれていたが、これは
私達が他の島へ出かけている間にニュ
ージランド兵によって処理された。こ
れ程大型でない大砲や銃の不発弾は、
部落を離れるとまだ草むらにむき出し
のまま転がっていた。

この他、日本軍が墨で書いた英文の
告知書、日本軍に殺されたニュージー
ランド人など民間人の墓やその話、島民
の対日感情、日本兵に教わったという
「アナタノナマエハ ナンデスカ」な
どの日本語や日本軍歌等々、更に外来
者は島を左廻りに一周しないと6年以
内に死ぬという言い伝え、北と南の島
の神様、亡父の頭骸骨を大切に飾って
いる島民のエリート、イースターの部
落対抗の歌と踊り、全寮制のミッショ
ンスクールの話、星空の下での漁火の
幻想的なゆらめき、自然美に似合わず
早朝の散歩には黄色い落し物々に要
注意の海岸等々、ギルバートの島々の
興味深い風俗、習慣、伝説等の見聞記
や体験記は紙数の関係で割愛します。

7、日本への郷愁
マーシャル、カロリン、マリアナの
旧内南洋諸島の人達は、日本の統治下
を離れて十数年経っていた当時でも、
日本への郷愁を抱き続けていた。

私達が訪れた当時、20代後半以上の
人達は大抵日本語を覚えており、特
に男性には日本語をペラペラ話す人が
多い。その記憶力を賞めると、「ジャ
ポール(ヤルート環礁)の日本語学校
で教わったんだ」と得意気に話し続け
る。教わった先生の名前を挙げて「こ
の人を知っているか」と尋ねる人もい
た。また、曾ての軍隊調の言葉を使う
人もおり、日本軍の下で働いていたと
言っていたが……。

文字でも片仮名を書ける人は少なく
ない。或る辺鄙な島にいた時、一人の
少年が私達のテントへ「ヤコエ・コン
(皆さん今日は)」とやって来て紙片
を出した。見ると片仮名で「ハライタ
ノ オクスリオ クダサイク」と書いて
あった。その少年の父親でも腹痛を起
したのか。その記憶力に感心して葉を
持たせた事もあった。また平仮名や漢
字を読める人も少なくなく、私達の所
に遊びに来ては日本の雑誌を読んだ
り、島を離れる時には雑誌を置いて行
ってくれ、とせがんだりした。揮一本
でもインテリの人がいて、雑誌に出て
いる葉の広告を読み、「コノ葉ハ頭痛
ニ効クト書イテアル。値段ハ二百円ダ
カラ56セント位ダネ」と正しく計算

し、「後デオ金ヲ渡スカラ、今度クル時ニ買ッテ来テ下サイ」と頼まれた事もあった。

彼等は日本をナイチ(内地)と呼ぶ。そして、ジャポールにナイチの軍艦が停泊していたのを見た、とその艦名を並べて黒い顔をほころばせていた人もいた。

それにしても、嘗ての日本は島民達をよく教育していたものと感心させられた。なお、旧内南洋の領域は広く、各群島で言葉が異っている。そこで共通語として英語の他、日本語も用いられているのもうなずける。クエゼリン島で見たクイハイルベカ・ラスクの日本文はその一例である。

島の人達は歌が好きである。特に女性の合唱はきれいで哀愁を帯びていた。

軍歌や古い流行歌、小学唱歌の他に作者の分らない日本語の歌もいくつか聞かされた。クアノ椰子ノ島以外以外の歌を空覚だが三つほど記してみる。

- 西ノ空ミテ サビシ(イ) 私
- 夢デミタヨ(ナ) キレイナ姿
- 時々オタヨリ 忘レナイデネ
- 時々オタヨリ 忘レナイデネ
- (アルノ、アイルック環礁等で)

- 私トアナタハ ナイショード
- 私トアナタハ ナイショード
- 私トアナタハ ナイショード
- 死ヌマデ 暮ラシマショウ

- ヨネマ ヨネマエー
- ヨネマ ヨネマエー
- ヨネマ ヨネマエー
- アンネ チューニチカ

- 可愛イ アノコハ ドココヨ
- 可愛イ アノコハ ダレノモノ
- 可愛イアノコハ私ノ思イ出ノココ
- 君ハナントイウ 美人デス
- ドウシテ ソンナニ キレイ

生マレテカラ見タ事ノ無イ様ナ美人(カロリン群島のノモイ環礁等で)このように彼等は日本語を通してナイチ時代を思い出し、大いになつかし

郷愁の例をもう一つだけ加えよう。彼等は米の飯や味噌汁は大好きだが貴重品だ。私達は行った島々で炊事係に島民をボーイに雇い、余った食事を分け与えていたが、或るボーイなどは目を離すと味噌汁を大量に作り、余らせて持ち帰って行くというチャッカリ屋だった。

またキッコーマンなどの名前を見つけて喜んだり、ナイチの煙草を欲しがって、キンシヤホマレはあるかとやってくる人もいる。ポマードも日本のは好評だ。アメリカのは柔すぎるし香りが悪いという。ヤナギヤ、メヌマという名前も知っていた。

こういう事からも、旧日本軍将兵の島での生活振りの一端がうかがい知れるのではないかと思う。(終)

栗林顧問

ツバル国名誉領事に

本会顧問、栗林徳五郎様は昭和五八年四月以来、キリバス共和国名誉領事をつとめられておりますが、更に平成元年六月、ツバル国名誉領事を拝命されました。

ツバルは戦前、キリバス(ギルバート諸島)と共にエリス諸島と呼ばれ、イギリスの植民地であった。日本がタラワ(ギルバート)を占有時代、アメリカは、フナフチ(ツバルの現首都)に根拠を置き、植民地行政を行なっていた。キリバスと同じく十五世紀後期より十八世紀にかけてヨーロッパの大航海時代に発見され、一九一五年に正

式にイギリスの植民地となった。キリバスとフィジーの間に点在する十よりなる小さな島々ツバルに住む全人口はわずかに八千人余り。キリバス(ミクロネシア系)とは人種を別にし、言語も異なる為、ツバル(ポリネシア)はあえてキリバスと分離して独立したがその人種交流は依然兄弟のようなものである。

産業としては、わずかなコブラ、魚しかいないので、船員を養成し、海外に出稼ぎに出ている。ツバル信託基金を設置、有志国より集めた援助金で国の財政を賄おうとしている。今、イギリスの手から離れて今後一国として生きのびていく為、水産、学校、病院、空港(観光)施設等、日本からの援助は欠かせないものになった。



靖国神社遊就館に

重錘式置時計を奉納

平成元年は、靖国神社御創立百二十一年に当り更に、御本殿の昭和十三年完成した記念すべき年であり、ますの

で、奉祝並びに御祭神奉慰の意を表す

るため重錘式置時計一台(セイコー、台座共)を奉納することとしました。六月二十九日の御創立百二十年祭の当日、役員の外、在京有志会員列席して遊就館一階北側休憩所にお納めいたしました。

遊就館拝観の折は是非御覧下さい。

マージナル、ギルバート
戦線に想う

蓮 尾 論 吉

昭和一八年一月一九日に始まったマキン・タラワ両島及び昭和一九年一月三〇日に始まったルオット、クエゼリン両島における熾烈な攻防の状況については、雑誌「丸」別冊「玉砕の島々(中部太平洋戦記)」「昭和六二年七月一五日潮書房発行)、児玉襄著「太平洋戦争(下)」「昭和五二年一月第二六版・中公新書(九〇)」、その他に詳しく紹介されているので、ここでは戦闘の状況については割愛させて頂くことにする。

孤立無援の下、劣勢にも拘らず勇戦奮闘、相手に多大の損害を与えた後、全員壮烈な玉砕を遂げられた我が勇士の闘いぶりについては、誠に肺腑を扶かれる思いがし痛恨極まりなく、どのように慰霊しても相済むものではないと思つた。

しかし、これらの勇士に対して、誠にお気の毒であったとしか言いようがないと思われれることは、日本軍の基地には飛行場関連施設、一般艦船及び潜水艦用施設は一応整つていて、緒戦においては大いに役立っていたようであるが、来攻を防ぐということについては、まともに対応出来るようにはなっていない、来攻の前に陸海軍部隊の増強はあつたにしても、地上の防備施設で

あるトーチカや砲台は、かならずしも充分ではなかつたようである。

相手が数隻の戦艦に巡洋艦や駆逐艦に航空母艦などを加え、さらに多数の上陸部隊を乗せた輸送船まで引き連れ、上陸に先立って物凄い砲爆撃を繰り返した後、強力な戦車や大砲を多数備えた上陸軍が進攻してきたのでは、艦船を撃破出来るほど強力な大砲を持たず、飛行機や潜水艦を捕捉するためレーダーやソナーが不十分であり、また、高射砲は飛行機を確実に撃墜出来ず、戦車を破壊出来る武器もほとんどないようでは、全く防ぎようがなかつたであらう。

これに対して米軍では、零戦を上回る性能を持ったグラマン F6F 戦闘機を多数準備し、強力な B24 爆撃機を近くの基地から飛ばせることが出来るようにし、また、高射砲弾には VT 近接信管を取り付けて、命中しなくても五〇米近くを通るだけで爆発するようにし、また、高性能のレーダーやソナーを備えていたため、昭和一八年頃からは日本の飛行機や潜水艦は米軍の艦船には近ずけないようになっていた。これでは日本の飛行機や潜水艦が健在であつたとしても、戦果はほとんど期待できなかったのではなからうか。以上のような状況下では不運にして米軍に上陸された基地は、残念ながら玉砕の外なかつたと思われる。攻撃は受けたが、たまたま上陸を免れた基地

では玉砕はしなくても孤立無援のため飢餓による犠牲者が多発したようである。

こん日の日本があるのは、これら多数の勇士の尊い犠牲のお蔭であることと思えば、我々としてこれらの英霊に報いる道は、慰霊の誠を尽さねばならないことは申すまでもないが、広い意味での国防に意を用い、末永く日本民族の維持発展を計ることではなからうか。これには国力に応じた備えをすると共に、何より大切なことは一致団結して、仮にも他国に乗ぜられて国内が分裂するなどのことのないようにすることである。また、国内にあつては少しでも良い社会を作る努力をすると共に、諸外国からは真に敬愛されるようにすることであらう。

ウオッセ島の今昔の

情報をお寄せ下さい

秋 本 英 郎

平成元年一月、厚生省主催のマージナル・ギルバート慰霊巡拝団に参加して色々考えさせられました。

六十三年初め「年末に巡拝が行なわれる」と聞き、「亡兄戦死場所である第二砲台」の位置を各方面から出されているウ島の地図三種を詳細に検討した結果、第二砲台が三カ所あることに気がつきました。他の砲台、トーチカ、穹窿(きゆうこく)の位置は違つ

ていません。

私が生還者や慰霊巡拝の経験者の皆さんにお手紙を差し上げる様になつたのは、昨年初めの慰霊巡拝が決定的になつた頃からですが、遂に現地へ着いても第二砲台の位置は不明のまま二月二十五日午後、訪島して慰霊祭を終了、「さて第二砲台へ」と大体の見当をつけて向かいましたが、滑走路から外海へ出るケモノ道を行くと、間もなく直径約百米程の大きな広場に出ました。下草が僅かに生えていて大きなヤシの木が五、六米置きにそびえています。その広場からは細いケモノ道が四方に伸びていて、外海とおぼしき方向に進むと小さな直径五米程の広場に出ました。そこにはやはり中心に大きなヤシの木があり、ケモノ道の両側は身の丈を越える藁と蔓草で視界は利かない上、道は藁と蔓草で歩くのが困難でした。歩きながら分かつた事は、つまり沢山ある「小ヤシの木広場」と「大きなヤシの木広場」とは四通八達しており、ヤシの実を収集する為のケモノ道らしい事が分かりました。更に外海方向へ進みましたが遂に外海へと思われる道は途切れてしまい、時間を見れば既に引き返すだけで精一杯、「折角、此処迄来たのに、砲台に行けないとは……」と涙をのんで引き返さざるを得ませんでした。そして考えられたことは、「ウ島の現在状況」、つまり「外海へ出る道はこれとこれだけ」

或いは「南部へ行く道は此処で途切れている」等々の状況が予め分かっていたほうが、どんなに有意義か、との思いに駆られました。これについては、「環礁第五十一号・十三頁掲載の私の今年一月慰霊巡拝記事の末尾」を参照にして頂くと良くお分かりになる、と思います。

これらについて第六十四警備隊軍医長奥信一氏は、「次のような準備が必要である」と言われています。

- ① 時間的余裕を十分に確保する事
- ② ジャングルを切り開く斧を初め伐採用具を日本から持参する事
- ③ 膝から下の足回りを蔽重にして葛や蔓に絡まれない服装である事
- ④ 海外方面に向かう場合は特に予め目標を確かめてから行動する事。目標となる建物もなくジャングルに視界を遮られて尋常では目的を達せられない。
- ⑤ 滑走路から、やや遠い目的地に達するまで(場所によっては目的地に着いても、必ずしも)何処にも水はないので必ず水筒を一杯にして携行する事

こうして帰国した私は、過去に訪島した方々、生還された方々に手紙を出して「ウ島の現在の戦跡の状況」を聞き始めました。その結果、戦中、戦後のウ島の歴史的な様々な事実を聞く事が出来ました。何れ、これらは別図にするか、又は一冊の本にしたい、と考

えています。これらの情報を下さったのは現在までに次の方々です。

稲毛三郎様・篠崎英夫様・山下 治様
三上英雄様・奥 信一様・土屋太郎様
佐藤宗不様・桜井秀夫様・大塚忠太様
新井武次様・糸井光雄様・人見善衛様
幸田喜七郎様・新堀福太郎様
中村久男様・伊藤英吉様・笹山 勇様
保坂芳夫様・高橋健次郎様
佐藤一徳様(願不同)

右の方々は、或いは写真を同封して下さり、或いは「あの方なら知っているでしょう」と他の方々の住所を正確に記入して下さい、特に土屋太郎様からは貴重な数枚のウ島の地図、更にその他「ウ島籠城概要」として年月日別、被害別、等々の別図、別表をお送り下さい、「是非、詳細な図面を作るように」との激励のお言葉も頂きました。又次の様な、図面にあらわせない情報までも、送って下さった方もいました。

○砲台は第七砲台迄あるようになっていたが、確か第七砲台は計画だけだった、と思う。
○砲台はコンクリートが打てないので、別の材料で作った。爆弾の直撃では吹き飛び、跡形もないのでは、と思う。

○第二砲台は二連装が二基で、外海に向かって右が第一番砲、左が第二番砲で、その間隔は約三十米、その後方約百米位に指揮所があり、海に向かって

指揮所の右後方に弾薬庫があり、その後方、約百米位に防空地下壕があった。戦死者埋葬場所は二番砲の左後方約二百米で、探照灯の後方。

○一つの砲台の人員は約三十人で砲手は常時、砲と寝起きをしており指揮所との交流は殆どなかった。

○滑走路はコンクリートでなく、アスファルト製との事。

等々………大変ご面倒をお掛け致しましたが、お蔭様で貴重な資料が集まりました。有り難うございました。

これらの情報を元に、何度も修正に修正を重ねて図面に記入して、現在「ウ島現況図の未完成の下書き」が出来ております。ついでには皆様から更に「ウ島の過去、現況」等をお知らせ頂き、現況図を一層、詳細なものにした、と考えます。このような地図があれば今後の訪島に多少でも役に立つのではないかと、思います。勿論、素人が作りますので、お世辞にも立派なものとは言えませんが………。

それでも、ないよりは、あった方が有益だと思います。どうぞ趣旨をご理解の上、本会へお便りをお寄せ下さる様、是非お力添えをお願い申し上げます。

特に今後、更に確認したい事は、
一、戦死者の埋葬場所の事ですが、どうも警備隊、航空隊と夫々別々に埋葬した様ですが、その位置を図面上に「島全体の埋葬場所の一

覧表」に出来たら、と考えております。

二、戦後の慰霊巡拝で、何年には何処に上陸して、何処で慰霊祭を行ったか、の「今迄の一覧表」が出来たらと考えております。

三、砲台、トーチカ、穹窿(きゅうく)の形状、性格、武器等は、どのように異なるのか、を御存じでしたら………。

これらについても是非、お便りをお願い申し上げます。

以上、色々申し上げましたが、私は「巡拝が終われば、それで全部終わった」という事ではなく、この島の移り変わりを歴史的、時間的経過を追って、常に確認していく必要がある、と考えています。何故なら、それは私達の肉親、同胞が未だに眠り給う「私達にとって大切な聖地である」と考えるからです。

若し「現在の現況図の下書きを見てから………」とお考えの方には、その旨、本会へ連絡を頂ければ、お送り致します。

なお、出来れば次号「環礁第五十三号」(平成二年七月一日発行予定)に、それまでに集まった情報を出来るだけ記入した「ウ島現況図」を掲載したい、と考えております。

情報、資料をお持ちの方々の御支援を切におねがいたします。

マーシャル方面遺族会会則

昭和 38 年 6 月 29 日制定

改正 (昭和 40・2・6 41・2・6 43・2・6 59・2・6
61・2・9 62・2・8 平成 1・2・12)

第一条 (名称) この会は、マーシャル方面遺族会といいます。

第二条 (事務所) この会の主たる事務所は東京都に置き、必要に応じ、全国各地に支部を置きます。

第三条 (構成) この会は、大東亜戦争中マーシャル諸島及びギルバート諸島で戦没した者の遺族を会員として構成します。

2 前項に該当する者は第十一条の会費を納入することにより、この会則に定める会員の権利を行使することができます。

第四条 (目的) この会は、前条に示す戦没者の英霊をお慰めすることを目的とします。

第五条 (活動) この会は、次の活動を行います。

- 一、毎年二月第二日曜日に靖国神社において慰霊の祭典を行います。
- 二、第三条に示す諸島に残された遺骨の収集につとめます。
- 三、現地に建立した慰霊碑の維持管理をはかります。
- 四、会員の相互扶助及び親睦をはかります。
- 五、その他この会の目的達成に必要な

なごこと。

第六条 (機関) この会の機関は、次のとおりとします。

- 一、総 会
- 二、役員会

2 定期総会は、毎年二月第二日曜日に靖国神社で開催します。

3 会長が必要と認めたときは臨時総会を開催します。

4 役員会は、必要に応じ随時開催し、会務の企画、運営実施にあたります。

5 各会議は会長が招集し、議事は出席者の過半数によって決します。

第七条 (役員の種類、職務) この会に次の役員をおきます。

- 一、会 長 一名
 - 二、副 会 長 若干名
 - 三、常任幹事 三名以内
 - 四、幹 事 若干名
 - 五、監 事 三名以内
- 2 会長は、この会を代表し、会務を総理します。
- 3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代理します。
- 4 常任幹事と幹事は、会長の指示により会務を分掌処理します。

5 監事は、この会の会計を監査します。

第八条 (役員を選任及び任期) 役員を選任は次のとおり行います。

- 一、会長及び監事は、総会で会員のうちから選任します。
- 二、副会長、常任幹事及び幹事は、会員の中から会長が指名します。

2 役員任期は、二ヶ年を一期とし、再任できます。

第九条 (名誉会長、顧問、相談役及び篤志会員) この会に、役員会の決定により名誉会長、顧問、相談役及び篤志会員をおくことができます。

第十条 (会友) 戦没者の戦友等で本会の目的に賛同する者を、その希望により会友とすることが出来ます。

第十一条 (会費) 会員及び会友は会費年額二千円を毎年定期総会の日迄に、又新入会員は入会の時その年度分の会費を納入して頂きます。

第十二条 (経理) この会の経費は会費、寄付金及びその他の収入により支弁します。

2 既納の会費、寄付金は、原則として返戻しません。

第十三条 (会計年度) この会の会計年度は、毎年十二月一日より翌年十一月三十日迄とします。

第十四条 (決算) この会の決算は監事の監査を経た後、総会に報告され、その承認を得なければなりません。

第十五条 (諸記録) この会の会務及び

会計は正確に記録され、会員はいつでも閲覧することが出来ます。

第十六条 (会則の改廃及び解散) この会則の改廃及び解散は総会で定めま

す。

2 解散の際保有する資産は靖国神社に奉納します。但し総会の決議により一部をこの会の目的に副う事業に寄付することが出来ます。

付 則
この改正は平成元年二月十二日から施行します。

特別弔慰金支給について

◎ 次の遺族 (戦没者等の死亡当時に 3 親等内であった方) で、一定の要件を満たす方に特別弔慰金 (額面 18 万円) が支給されます。

- ① 昭和 60 年 4 月 1 日から平成元年 3 月 31 日までの間に、公務扶助料、遺族年金等の受給権者が遺族内にいなかった方。
- ② 昭和 60 年 4 月 2 日から平成元年 4 月 1 日までの間に、戦傷病者戦没者遺族等援護法による弔慰金の受給権を取得した方。

◎ ただし、今までに特別弔慰金の支給の対象となつた方には支給されません。

◎ 詳しくは、市区町村の援護担当課にお問い合わせ下さい。

(厚生省)

名簿訂正

(3) 昭和63年7月1日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏名>	<訂正事項>
48	小山キミ子	戦歿地をエビゼと訂正
55	江坂弘	の次に新会員を追加
	穴戸献吉郎	☎239 横須賀市粟田1-4-6 ☎0468-48-2976 兄 穴戸尚利 ブラウン 3130
	堀山睦子	☎246 横浜市瀬谷区中央36-8 ☎045-301-1731 姉 堀山信太郎 南洋 陸軍
	赤城とみ子	☎252 綾瀬市深谷2283-5 ☎0467-77-9383 妹 堀山信太郎 南洋 陸軍
56	斎田ヨシエ	住所・電話を、新潟市内野町206-3 ☎025-263-2830 と変更
57	藤田ヨリ	戦歿地を、ルオットと訂正
64	岡本はぎ	死亡により、弟岡本幸晴が継承
	岡本幸晴	☎457 名古屋市南区堤町5-31 ☎052-691-1806 弟 岡本嘉晶 クェゼリン 3133
67	安福道明	の次に新会員を追加
	国見嘉治	☎660 尼崎市元浜町1-8 ☎06-417-5237 弟 国見一男 クェゼリン 海軍
79	安永嘉彰	の次に新会員を追加
	鬼海富夫	☎863-27 天草郡天草町下田南3957 ☎0969-42-3066 弟 鬼海道春 クェゼリン 6通
	松本義雄	☎861-52 熊本市小島上町1689 ☎096-329-7298 兄 松本菊次 クェゼリン 6根司
	蓑田幸人	☎863-11 天草郡新和町碓石2394 ☎0969-46-2557 兄 蓑田康男 クェゼリン 海軍
	宗像政敏	☎863 本渡市楠浦町1818 ☎0969-23-3078 兄 宗像進 タラワ 佐7特
86	塩野宣徳	住所・電話を ☎158 世田谷区中町3-11-12-103 ☎93-704-8693 と変更

宮崎県	山内キク	佐藤 敏子
大分県	木村三三夫	赤塚 美正
長崎県	安達シヅヨ	三浦 一郎
佐賀県	草場 マキ	森 ゆき江
福岡県	森 キヨ子	加瀬 よし
高知県	田中 百合	矢野 雄三
愛媛県	長岡 俊夫	小泉 文江
岡山県	浜田 数江	佐藤 宗丞
鳥取県	井上 照美	平松 菊枝
兵庫県	枝光 剛郎	米田 トシ
京都府	谷 正文	末松 乙夫
愛知県	川越 コウ	山田 八重
静岡県	市川 市郎	後藤 行雄
岐阜県	市川 市郎	市川 市郎
長野県	末松 乙夫	田中トメノ
新潟県	米田 トシ	
神奈川県	平松 菊枝	
蓮尾論吉	佐藤 宗丞	
水野 はな	小泉 文江	
東京都	矢野 雄三	
千葉県	加瀬 よし	
群馬県	森 ゆき江	
福島県	三浦 一郎	
山形県	赤塚 美正	
秋田県	佐藤 敏子	

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

寄付者芳名

(敬称略・順不同)

鹿児島県 丸田 キワ
会友篤志会員等 井上 義夫
キリバス名誉領事館

以上は平成元年五月一日から元年九月末までに寄付された三十七名で金額の合計は四一五、〇〇〇円でした。

靖国神社昭和六十二年大修理竣工

昭和六十一年に着工した靖国神社の大修理工事は、御本殿が昨年一月に竣工し、拝殿、廻廊などの屋根銅板瓦葺葺替工事すべて完了しました。十月十七日よりの秋季例大祭にあわせ十九日には御創立百二十年記念大祭、二十日には昭和六十二年大修理竣工奉祝大祭が厳粛かつ盛大に斎行されました。靖国神社百年の御案泰が確定されましたのは私どもにとって何より喜ばしいことです。この大工事が関係者延二万四千余人の方々の真剣に、聊かの労を惜まず御創建の折の工法に遵ったこと又、この大工事に唯一件も事故のなかったことを承り感銘いたしました。

(1頁より)

本会の直会旅行は、昭和四五年二月六日に伊豆修善寺に始まり二十一回目となりました。今年は思い出の修善寺を訪ねることにしました。

今年の日曜と祝日が重なり翌日が振替休日の連休となったため、観光施設はすべて休日料金となりましたが、内容はそれ相応のものになっております。御期待下さい。

順路

靖国神社―東名高速―沼津―修善寺(泊)―三津浜―三島駅―東名高速―東京駅―九段会館

乗物

往復とも大型観光バス

宿泊

修善寺温泉 水月ホテル

費用

小学生以上 二万五千円
バス・宿泊、中食二回を含む

申込

一月十五日迄に住所、氏名、年齢、性別を記入して本会にお申込み下さい。申込順に受付けて一月十五日の前でも五四名に達した時締切ります。

同室御希望は出来る限り考慮します。お書添え下さい。

本会が受取った申込みは旅行主催会社に取りつき、主催会社から申込者全員に旅行に参加できるか否かを一月末迄に通知します。

申込み後の取り消し、変更等は速やかに左記主催会社に通知して下さい。

取り消しの時は先ず同社に電話をし、本部にもその旨お知らせ下さい。

旅行主催会社

東京都千代田区大手町一―六一―日本通運(株)大手町旅行支店

第四課 桐谷・沖井

☎ 03―二〇一―一五九八

コース等 靖国神社での懇談、総会、慰霊祭を終り次第、バスはお弁当などを積みこみ、首都高速、東名高速道を一路伊豆修善寺に向います。

弘法大師縁の霊泉、源氏の興亡にまつわる歴史の町は正に湯どころ伊豆の名湯です。神経痛、リウマチス、胃腸病などには特に効能ある由です。

水月ホテルの社長野田勲様は海軍経理学校(28期)の出身で今回もまた格別のサービスを頂くことになりました。

翌十二日は、名刹修禪寺に詣で、頼の墓や尼將軍政子が頼家の冥福を祈って建てた指月殿、独鈷(トッコ)の湯その他歴史の数々を訪ね、修善寺物語の世界に思いをいたしましょう。

中食は、駿河湾に浮ぶスエーデンの豪華客船スカンジナビア(電話〇五五九―四二―二二一一)に北欧風の魚料理が用意されております。食後船内を見学し、バスは三島駅で途中下車の人と別れ、東名高速道を東京駅に向います。

東京駅帰着は午後六時の予定ですが車の渋滞が予想されますのでお帰りのキップは一時間位の余裕をみて御用意下さい。

謹賀新年

平成二年元旦

◎ 本会役員及び篤志会員

名誉会長	浮田信家	篤志会員	石井清
顧問	栗林徳五郎		土屋太郎
相談役	大給湛子		徳原徳子
会長	佐藤宗丕		長谷川栄次
常任幹事	秋本英郎		長谷川敏
	佐竹エス		浜松恒雄
	昼間栄平		本埜和昭
幹事	荒木常子		松平永芳
	石谷典夫		村瀬松雄
	黒川誠夫		森山喜久雄
	滝林芳夫		山村喜久要
	山口良二		横溝幸四郎
	柴崎良晃		
	高橋鎮夫		

念のため再び申しあげます。申込みは一月十五日迄となっておりますが、希望者がバスの座席の数に達した時はその時点で締切らせて頂きますので、申込みはなるべく早くお願いいたします。

当日のお申込みはお受けできないと思われまます。

本部

〒103 東京都中央区日本橋人形町
一―八―二(泉商事ビル)
マーシャル方面遺族会

電話 〇三―六六一―八七六〇番
FAX 〇三―六六一―六二四一